

氏名	山中 政子 (やまなか まさこ)	
学位の種類	博士(看護学)	
学位授与番号	甲 第 13 号	
学位授与年月日	平成 31 年 3 月 6 日	
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項該当	
学位論文題名	通院中の成人患者のがん疼痛セルフマネジメントを促進する看護介入プログラムの開発に関する研究  ( A Study on the Development of a Nursing Intervention Program for Promoting Self-management of Cancer Pain in Adult Outpatients)	
論文審査委員	(主) 教授	赤澤 千春
	教授	佐々木 綾子
	教授	鈴木 久美

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

#### 《緒言》

通院がん患者は入院患者より痛みが有意に強く、65 歳未満のがん患者は 65 歳以上より痛みの有症率が有意に高いと報告されている(榊原ら, 2015)。また、がんの進行により痛みが増強すると身体機能は低下し、社会活動は妨げられ、不安などの精神的苦痛やスピリチュアルペインの表面化へと患者の苦痛は増幅する。さらに、患者は麻薬性鎮痛薬への懸念や誤解により鎮痛薬を適切に使用できていないと報告されている(Naveh, Leshem, Dror, & Musgrave, 2011)。これらのことから、がん疼痛のある成人患者が、よりよい社会生活を送るためには、がん疼痛から派生する諸問題に患者自身が主体的に取り組むセルフマネジメントが必要である。そして、患者が自宅でがん疼痛をセルフマネジメントするためには、外来での医療者による援助が不可欠である。しかし、わが国では通院中の成人患者のがん疼痛セルフマネジメントを促進する看護介入として構造化されたものは存在しない。そこで、本研究は、通院中の成人患者のがん疼痛セルフマネジメントを促進する看護介入プログラムを開発することとした。

#### 《目的》

本研究は、通院中の成人患者のがん疼痛セルフマネジメントを促進する看護介入プログラムを開発することを目的とし、以下の 4 部で構成されている。

1. がん疼痛のセルフマネジメントを促進する教育的介入に関する文献レビューを行い、がん疼痛患者のセルフマネジメントを促進する教育的介入の内容の詳細を明らかにした。
2. がん疼痛のセルフマネジメントの概念分析を行い、概念の属性、先行要件、帰結を明らかにしたうえで、理論的定義を明確にした。
3. 質的統合法(KJ 法)を用いて、通院中の成人患者のがん疼痛に対するセルフマネジメントの様相を明らかにした。
4. 第一部の文献レビューと第二部の概念分析、第三部の質的研究をもとに、通院中の成人患者のがん疼痛セルフマネジメントを促進する看護介入プログラムを開発した。

#### 《方法および結果》

第一部の研究は、がん疼痛患者のセルフマネジメントを促進する教育的介入の詳細を明らかにするため、30 文献を対象に文献レビューを行った。分析の結果、2010 年以降の海外文献が多く、介入方法はメインセッションとフォローアップを組み合わせており、対面式個別介入が多用されていた。また、教育内容は薬理学的疼痛緩和法や痛みのセルフモニタリング、医師とのコミュニケーションであり、介入成果は疼痛緩和と知識の改善であることが明らかになった。

第二部の研究は、がん疼痛のセルフマネジメントの属性と先行要件、帰結、理論的定義を明らかにするため、Rogers の概念分析の手法を用いて 27 文献を分析した。分析の結果、概念の属性として【医療者との相互作用】と【疼痛管理の意思決定】、【痛みに関する課題解決のプロセス】、【自己効力感】、【疼痛緩和方略を日常生活に組み入れる】が抽出され、理論的定義は、がん疼痛をもつ患者が医療者との相互作用のもと疼痛管理することを意思決定し、痛みに関する課題を解決する中で自己効力感を高め、日常生活の中に疼痛緩和方略を組み入れていくプロセスと定義付けられた。

第三部の研究は、通院中の成人患者のがん疼痛に対するセルフマネジメントの様相を明らかにするため、がん疼痛のある成人患者 16 名に半構造化面接を行い、質的統合法(KJ 法)を用いて分析した。分析の結果、シンボルマークは【医療者との協働関係】と【がん疼痛から派生する課題】、【医療者とのやり取りに基づく鎮痛薬の自己調整】、【身体感覚に基づく鎮痛薬の自己調整】、【穏やかさを保つことの調節】、【疼痛緩和による生活の充実とがんに囚われることからの解放】、【生活を維持するための自己努力】の 7 つに統合された。

第四部の研究は、がん疼痛セルフマネジメントを促進する看護介入プログラムを開発するため、第一部、第二部、第三部の結果をもとに看

看護介入プログラム原案を作成した。介入の対象は、がん疼痛を有する20歳～70歳未満の通院患者で麻薬性鎮痛薬を使用している者とした。プログラムの目標は、がん疼痛のある通院中の成人患者が、医療者との協働関係のもと、がん疼痛から派生する課題に対し、生活に合わせて積極的に対処する中で自己効力感を高めることにより、痛みが緩和され QOL 向上につながることにした。構成要素は、[医療者とのコミュニケーションを促す]と[痛みに関する課題の意識化を促す]、[痛みのセルフモニタリングを促す]、[麻薬性鎮痛薬と副作用の自己調整を促す]、[ストレスマネジメントを促す]、[生活を維持するための備えを促す]とした。介入方法は、対面式個別介入とし、教育的支援と認知的支援、行動的支援、情緒的支援の4つの技法を用いることとした。介入の回数は3回とし、セッションごとに患者目標を設定した。介入提供者はがん看護分野の専門看護師および認定看護師とした。作成したプログラム原案を洗練化するため、看護師10名と薬剤師2名を対象としたグループインタビューを行い、改善点を明らかにした。介入対象について、麻薬性鎮痛薬の詳しい説明を受けていない患者は本プログラムを適応することが難しいため介入対象から除外し、介入提供者が介入対象を容易に選定できるようにフローチャートを作成した。介入提供者については、認定看護師がリクナースを教育している施設があることから、がん疼痛患者への看護において専門看護師および認定看護師と同等の役割を担っている看護師を追加した。介入方法については、セルフマネジメントを強制するような表現を、患者に寄り添い一緒に考える姿勢を表す表現に工夫した。また、患者に医師とのコミュニケーションの様子や困っていることを話してもらい、看護師が診察に同席できるようにした。これらの追加、修正により洗練化されたプログラムを修正案とした。さらに、看護介入プログラムの洗練化を確認するために、看護師10名と薬剤師2名に質問紙調査を行い、プログラム修正案の適切性と臨床適用可能性を評価した。11名からの回答の結果、プログラムの適切性と臨床適用可能性は概ね認められ、意見として、フローチャートはわかりやすい、支援内容が明確になった、是非使用したい、患者も看護師も取り組む内容が確認できるため看護の質向上につながる等があった。そして微修正を加えて『通院中の成人患者のがん疼痛セルフマネジメントを促進する看護介入プログラム初版』を作成した。

#### 《結論》

本研究により、がん疼痛患者の体験にもとづく日本の臨床に合った看護介入プログラムを開発した。このプログラムは、通院中のがん疼痛を有する患者の主体性を重視したセルフマネジメントへの看護介入が構造化されており、患者に関わる際の看護方略が具体的で明確になっている。さらに、日本の臨床に適用でき、通院中の成人患者のがん疼痛セルフマネジメントを促進する可能性をもつプログラムであると考えられる。今後は介入研究による臨床での有用性と効果の検証が課題である。

### 論文審査結果の要旨

通院中の成人患者が、自宅や職場でがん疼痛から派生する諸問題に対処するためには、患者のセルフマネジメントが必要で、通院中の成人患者のがん疼痛セルフマネジメントを促進する看護介入プログラムを開発することを目的とし、4段階で進めた研究である。

第一部では、がん疼痛を有する患者のセルフマネジメントを促進する教育的介入に関する文献レビューを行い、30文献の分析結果から、介入方法は個別介入による複数回のセッションが多用され、内容は薬理学的疼痛緩和法やセルフモニタリング、医師とのコミュニケーション等であることを明らかにした。第二部では、がん疼痛のセルフマネジメントの概念分析を行い、27文献の分析で『医療者との相互作用』『疼痛管理の意思決定』『痛みに関する課題解決のプロセス』『自己効力感』『疼痛緩和方略を日常生活に組み入れる』の属性を抽出し、「がん疼痛をもつ患者が医療者との相互作用のもと疼痛管理することを意思決定し、痛みに関する課題を解決する中で自己効力感を高め、日常生活の中に疼痛緩和方略を組み入れていくプロセス」と定義した。第三部では、通院中の成人患者のがん疼痛に対するセルフマネジメントの様相を明らかにするために、がん疼痛のある患者16名に半構造化面接を行い、質的統合法(KJ法)を用いて分析した。その結果、【医療者との協働関係】【がん疼痛から派生する課題】【医療者とのやり取りに基づく鎮痛薬の自己調整】【身体感覚に基づく鎮痛薬の自己調整】【穏やかさを保つことの調節】【疼痛緩和による生活の充実とがんに囚われることからの解放】【生活を維持するための自己努力】の7つに統合された。第四部では、第一部、第二部、第三部の結果をもとにプログラムの構成要素と介入方法、介入内容を検討し、がん看護の専門看護師、認定看護師向けの『がん疼痛セルフマネジメントを促進する看護介入プログラム原案』を作成した。プログラム原案を洗練化するために看護師10名と薬剤師2名にグループインタビューを行い、またプログラムの適切性と臨床適用可能性を評価するために看護師9名と薬剤師2名に質問紙調査を行った。プログラムの適切性と臨床適用可能性は概ね認められ、『通院中の成人患者のがん疼痛セルフマネジメントを促進する看護介入プログラム初版』を作成した。

本研究により、がん疼痛を有する患者の体験にもとづく日本の臨床に合ったプログラムが開発され、今後は介入研究による臨床での有用性と効果の検証を行い臨床での発展性に期待できる研究であると考えられる。

以上により、本論文は本学大学院学則第11条2に定めるところの博士(看護学)の学位を授与するに値するものと認める。

(主論文公表誌)

Health, 10: 1520-1538, 2018